

ROTOBO

Connecting Markets

ロシアNIS経済速報

一般社団法人 ロシアNIS貿易会

2023年(令和5年)4月5日号 No.1921

目次

■ エリガ炭 鉱、どん底からの復活	齋藤 大輔 1
■ 統計速報	6
2023年1～2月の日本の対ロシア・NIS諸国輸出入通関実績／6	
2023年1～2月の日ロ貿易／7	
■ キーパーソン	10
スマイロフ・カザフスタン首相再任／10	
■ トピックス	11
JBIC、ウズベキスタン天然ガス火力発電事業にプロジェクトファイナンス／11	
日本政府、ロシア最恵国待遇除外延長／11	
トヨタ、サンクトペテルブルク工場を国営機関に移管／11	
日本、ロシア向け輸出禁止対象品目を拡大／11	

エリガ炭 鉱、どん底からの復活 — 日本が権益獲得を目指した鉱床の現在 —

(一社)ロシアNIS貿易会 ロシアNIS経済研究所
部長 齋藤 大輔

はじめに

ウクライナ侵攻後のロシアを巡る情勢変化の中で、ロシアの石炭産業は岐路にたたさされている。ロシア最大の生産地域であるクズバス地域の石炭会社はとりわけ厳しい状況にあると、昨年のデータが物語る。ロシア最大産地、クズバス地域では、生産量と輸出量がともに前年より2,000万tほど減り、アジア太平洋地域への輸出ルートとなる東部方面への出荷量も前年より300万t減少している。

欧州連合(EU)はロシアからの石炭の輸入禁止に踏み切り、日本は段階的な削減を進め、ロシアの資金源を絶つことに力を注ぐ。禁輸措置を受けようとも、おいそれとは従えないのがロシアである。中国やインドなど新市場の開拓に乗り出している。

ただ、全体で見ると、西側諸国の制裁や禁輸措置という厳しい状況下でも、ロシアの石炭産業は好調を維持している。2022年の統計を見ると、ロシアの生産量は4億3,700万tと、前年と比べ0.4%の増加となった。この増加を支えたのが、エリガ炭 鉱での増産である。同炭 鉱の2022年の生産量は前年よりも540万t多い、2,010万t(前年比37%増)に達した。

そこで、今号では、20年前に日本企業が権益獲得を目指したエリガ炭 鉱の、これまでの道のりを紹介する。